

# 深川の老漁夫

岡本綺堂

「君は語る」

この頃は年を取つて、すっかり不精になつてしまつたが、若いときには釣道樂の一人で、春は寒いのには寒釣りにゆく。夏は梅雨に濡れながら鯉釣りや、蝦釣りにゆく。秋はうなぎや鱧の夜釣りにゆく。冬も寒いのに沙魚の沖釣りにゆく。今から思へば、ばか／＼しいほどにうき身をやつしたものであつたが、これも矢張り降りつゞく梅雨にぬれながら木場へ手長蝦を釣りに行つたさきに、土地の人から聞かされた話の一つで、江戸の末期から明治の初年にかけての世界であると思つて貰ひたい。

深川の猿江に近いところに重兵衛といふ

併し口のうるさい世間の人々がそれを其儘に見逃す筈がなかつた。釣りにも綱打ちにも出ない漁師が、いつも魚を絶やさないこと云ふには何かの仔細がなければならぬ。ある者は彼が船荷の信者であるのから附會して重兵衛は狐を使ふのであると云ひ出した。いや、狐ではない、河童を使ふのだといふ者もあつた。いづれにしても、重兵衛は狐か河童のたぐひを使役して、彼等に魚を捕せるのではあるまいか、近所の人たちに疑はれてゐた。

それに就ては、かういふ話が傳へられた。ある夏の夜ふけに、近所の源吉といふ十八歳の若者が小名木川の岸へ夜釣りにゆく。七八間ばかり離れたところへ突然に凄まじい水音がきこえた。魚の跳ねるのではない、水音がきこえた。魚の跳ねるのではない、もしや身投げではないか、危んで、水音のひびいた方角へ駈けてゆく。岸のあひだには一人の男があぐらをかいて煙草をのんでゐた。それは彼の重兵衛で、今こゝへ駈

男が住んでゐて、かれは河童といひ、狐といふ、二つの縛名を所有してゐた。その本業は漁師であるが、少しく風變りの男で、若いときに一度は女房を持つたが、なにか氣に入らないといふので離縁してしまつてそれから後は五十を越すまで獨身で押通して來た。いや、それだけならば別に問題にもならないのであるが、重兵衛はこの二三年來、自分自身はあつた綱打ちに出たこともなければ、魚釣りに出かけたこともなく、殆ど懐ろ手で暮してゐるのである。さ／＼に小博奕ぐらい打つやうであるが、それで遊んで暮して行けること云ふほどでもない。更に不思議なのは、前にもいふ通りかれは碌々に商賣に出ないにも拘らず、いつも相當の魚を魚籠や桶にたくはへてゐるこゝである。漁師が魚を持つてゐれば食ふには困らない。そこで、彼は格別の働きもしないで、寢酒一合ぐらゐには不自由無しに生きてゐられるのであつた。

けつけて來る足音を聞く、かれは俄に立ち上つて、睨むやうに源吉を見た。

「をぢさん。今の音はなんだらうね。」

源吉は訊いた。

「なんでもない。岸の石が轉け落ちたのだ。」

「重兵衛はしづかに云つた。『おれの釣場へ來て荒しちやあいけねえ。もつこあつちへ行け。』」

それが不斷には様子が變つて、なんだか怖ろしいやうにも思はれたので、年のわか

い源吉はそのまゝ素直に立去つた。重兵衛はおれの釣場と云つたが、別に釣竿らしいものを持つてゐることも見えなかつた。而もその魚籠のなかには四五匹の大きい魚が月明りに光つてゐた。

源吉はあくろ日それを近所の人たちに囁いたので、重兵衛に掩ひかゝる疑ひはいよ／＼深くなつた。そればかりでなく、更にかういふ事實が発見された。重兵衛の魚には怪しい爪のあとが附いてゐる。いふので

# 警戒笛

赤切符

「眞に恐れ入りますが煙草は止めて戴けないでせうか」斯う丁寧に言つて彼に頭を下げた。メルナルは平氣な顔で、

「僕は好きな事は何んでもやるんです」と答へて紳士の顔にうま相に葉巻の煙を吹きかけた。紳士は憤然として歩き出したが餘つ程腹が立つたと思へて非常警報器の紐をグイミやつて了つた。汽車は止つた。車掌が現はれた。

「一體何事が起つたんです」車掌は訊れた紳士はこの有名な劇作家を睨みつけて

「この乗客は禁煙車で煙草をのんでゐるのです」

車掌はこはい顔をしてメルナルの方に近づいた。メルナル平然として

「車掌さん一寸つとお待ち願ひたい。先づあの紳士の切符をおしらへ願へませんか」

車掌が紳士の切符を調べてみる。先生赤切符を握つてゐた。紳士は一等車から追ひ出されて汽車は動き出す。

隣りに坐つてゐた一乗客メルナルに向つて、

「然の全體如何してあいつ赤切符を持つてゐたつてのがお解りになつたんです」と訊れると

「何、實に簡單なこつてすよ。奴さん切符をチョコッキのポケットに入れる時チラツクミ見るミ僕の切符とおんなじ色だつたんです」

食へないスープ

メルナルがある時ニースの料理店で食事をしてゐた時の話である。

「給仕このスープは食へない！」給仕は急いで皿を下げてメニュー

ある。注意してみるに、どの魚にも頭が背か腹かに吃さ爪のあしが残つてゐるので、それは網や釣針にかゝつたものでなく、何かの動物に捕へられたものであることが確かめられた。問屋で詮議しても、重兵衛はいつても曖昧な返事をしてゐた。深くそれを問ひつめるに、彼は杜舞には腹を立てた。「そんな面倒な詮議をするなら、こゝへは持つて来ねえ。おれは自分で買つて来る。」彼は問屋の詮議をうるさがつて、自分で魚を賣りあるくやうになつた。その頃の深川邊には貧乏長屋が多かつたので、そこらの長屋のおかみさん達は値の廉いのに惚れて重兵衛の魚を買つた。勿論、その魚を食つて中絶したなどいふ者もなかつた。そのうちに又こんな事件が出来ました。彼の源吉といふ若者が、秋の雨のそぼ降る夜に重兵衛の家の前を通りかゝるに、灯のひかりの薄く洩れる雨戸の内から軽い咳拂ひをするやうな聲がきこえた。と思ふ間

もなく、源吉の傘が俄に重くなつた。不思議に思つて、その傘を持ちかへようとする途端に、傘の紙も骨も一度にばらばらに破れて、何物かが彼の顔を滅茶苦茶に掻きむしつた。源吉は年こそ若けれ、瀆育ちの頑丈な男であつたが、不意の襲撃に面食つておめく、相手を取逃したばかりか、流れる血汐が眼にしみて、雨のなかにつまづいて倒れた。その騒ぎに近所の人たちも駆け付けたが、そこらに怪しい物の姿はもう見えなかつた。源吉の話によるに、かれを襲つたものは確に獣である。傘の上に飛びかかつて、その顔を引つ掻いたのをみるに或は狐ではないかといふのであつた。場所が重兵衛の家の前で、その怪物が狐であるにすれば、彼が狐を使ふといふ噂もいよゝ、噂ではないらしく思はれた。彼が狐を使つて窃かに魚を捕らせてゐるにこそ源吉が偶然に見つけて、それを世間へ吹聴したので、その復讐の爲にこんな目に逢

を彼に差し出した。ベルナルはメニユを點検して他のスープを注文した。給仕が注文の品を彼のテーブルに置いて行つて了ふに、暫くたつてベルナルは又給仕を呼んだ。「給仕！ このスープは食へない！」給仕は何に事やら解らず頭を呼んだ。頭は早速テーブルの處にやつて来て「一體如何いふ御注文なんで御座いますか？ このスープは手前共自慢のスープなんで。誰方でも眞に上手だとお讚めになりますんで……」「いや、僕も眞にうま相なスープだと思つてゐるんだよ。處が匙がないのさ！」

長靴

スイフト（あのガリバー旅行記を書いた皮肉屋）或る日馬に乗らうとして下男に長靴を出せと命じた。持つて来たのを見ると泥だらけである。

はされたのではないかといふものも、まんざら根據のない想像説でもなかつた。併し本人の源吉が重兵衛に向つて正面から苦情を申込むには、理由が何分にも薄弱であつた。暗いなかの不意撃であるから、彼は勿論その正體を見まよけたわけでもなく、又その歌らしい物が重兵衛の家から出入するところを見つけたといふわけでもないのであるから、相手が知らないといふ切ればそれ迄のことで、所詮は水かけ論に終るのほかは無いので、源吉も残念ながら泣き寝入りにしてしまつた。他の者からは勿論なんとも云ひやうはなかつた。

かうして、表面は無事に済んでしまつたが、諸人の疑惑はいよゝ深くなつた。源吉の顔の疵は癒えても、重兵衛の噂は消えなかつた。併し源吉の先例があるので、諸人はその復讐を恐れて、直接に彼に對して何ういふ制裁を加へることも出来なかつたが、自然の結果として彼を忌み嫌ふやうになつた。陸では狐か河童かといふ綽名を呼ばれ、一種の薄氣味の悪い人間として世間から睨まれながらも、彼は直接になんの迫害を蒙ることもなく、相變らず出所の怪しい魚を廉く賣りあるいて裏長屋のおかみさん達に觀迎され、自分も獨り者は氣樂だといふやうな顔をして、一合か二合の寢酒を飲んでゐるらしかつた。

「何故磨いて置かないのだ？」  
「へい、まことに如何も……然しこんなお天氣ですから磨いて置きましたも如何せ又直ぐ汚れて了ふと存じます」  
スイフト一言も言はずに泥靴をつけて出掛けて了つたが、やがて歸つて来た。下男を關に飛び出して「旦那様、旦那は戸棚の鍵を置いておられたら、お蔭で私は蓋飯が戴けませんでした」と泣つて面をするにスイフト笑つて「俺はちやんと知つてたさ。だが蓋飯を食つたつて如何せ晩には又腹が減つちまふだらうと思つたかな」

血統

或る無遠慮な男が大ジニーマの處へ来て「貴方の親父さんといふのは黒んぼだつた相ですれ」と訊れるにジニーマ答へて「えつ、黒んぼじゃなかつたです



いで困つてゐるのを、重兵衛がどう掛合つたのか、養女に貰ふことにして自分の家へ連れて来たのである。片輪ではあるが容貌も悪くない、その上におまなく素直に働くので、重兵衛はよい娘を貰ひあてた喜んで可愛がつてゐた。近所の人達もおせん素性をよく知つてゐる上に、片輪の少女に對する一種の同情もまじつて、その父を嫌ふやうにその娘を嫌ひはしなかつた。食ふや食はずの實家にゐるよりも、こゝへ買はれて来た方がおせんの爲にも仕合せであるらしく思はれた。

それから二月ばかりは無事に過ぎて、養父三養女はいよいよ睦まじいやうに見えたが、ある朝おせんが家の前を掃いてゐるさ、その頬や頸筋に生々しい掻き疵のあるのを近所の人たちが發見した。疵のあまに血が滲んで、見るから酷たらしいのに驚かされて、手眞似でその仔細を聞き糺したが、何分にも要領を得なかつた。併しその

疵のあまが彼の源吉の疵によく似てゐるの、近所の人たちも大抵は想像した。「可愛さうに、あの子も吃ち重兵衛の狐に遣られたのだ。」

併し源吉の場合には違つて、おせんは養父にも可愛がられ、自分もおまなく働いてゐるのに、何でこんな酷たらしい復讐を受けたのか、その仔細は判らなかつた。もう一つ不思議なことは、その夜更けに、重兵衛の家の奥で彼が小聲で何者かを叱り罵るやうな聲がきこえた。床の下かと思はれるあたりで、獸の唸るやうな奇怪な悲しげな聲も洩れた。さうして、そのあくる日は重兵衛が久振りで綱打ちに出てゆく姿を見た。めづらしいことだ。近所でも噂してゐるさ、彼はその後毎日綱打ちに出て、他の漁師達とおなじやうに稼ぎはじめた。それでも決して夜網には出ないで、日の暮れる頃には必ず歸つて来た。おせんの顔の疵も塗り薬などをしてだん／＼に癒つて来た。

がれ。黒んぼこの混血兒でしたよ。私の祖父といふのが、こいつ確に黒んぼでした。祖父の祖父といふは、狼でしたよ。つまり何んですよ、つまり私の血統といふものは君達の血統が終つた點から始まつたといふわけになりますな」

### たつた一言

ザヨルザユ・サンが或る日或るアルザヨアの家庭に招待された。當時の上流社會の御歴々は皆一掃にそこに集つたわけである。大僧正とか知事だとか將軍だとかいふ連中である。彼等は皆食事中にこの有名な女流小説家から定めしすばらしい話しが聞けるだらうと待つてゐたのである。處がザヨルザユ・サン一言も喋らない。彼女の隣りに坐つてゐた知事がサラダの皿を彼女に廻さうとした時、噓をやつた。横へ向く暇がなくてザヨルザユ・サンは皿に向けてグンヤンとやつて了つたのだ。彼女は「豚め！」と言つて食事の終るまで又黙り通した相だ。

近所の人とその顔の疵を指さして、そんなになつても實家へ歸りたくはないか。手眞似で訊いたことがあるが、おせんは忌な顔もせず、さり／＼と笑ひもせず、少しく顔を紅くして頭を掉つてゐた。

九月の末である。その頃はまだ舊歴の秋もおひ／＼に暮れかゝつて、深川には時雨めいた空が幾日もつゞいた。その日も朝から陰つて、貝がらを置いた家根の上に折々は弱い日かけを落してゐたが、午後から東南の風が俄に吹いで、陽氣も薄ら寒くなつたかと思ふさ、三時過ぎ頃から冷たい霧が一面に降りて来て、それが次第に深くなつた。重兵衛の軒先に立つてゐる一本の柳もその瘦せた姿を暗く包まれてしまつた。

「これぢやあ沖はどうだらう。」

ここらの人たちは沖を案じてゐたが、沖の霧は果して陸よりも深かつた。ここらの漁船はみな洲崎の沖に出てゐたが、海の上は夜よりも暗い濃霧に鎖されて、水に馴染れ

てゐる漁師達も櫂や棹を働かせる術を知らなかつた。度胸を据えて落付いてゐるのもあれば、どうかして漕ぎ抜けようか迷ひに迷つてゐるのもあつた。重兵衛もその一人で、かれは自分ひさりで小舟をこぎ出してゐたが、あせりに燥つてこの霧の海から逃れ出ようさ、一生懸命に漕いでゆくさ、方角をあやまつて芝浦の方へ進んでしまつた。それに氣が注いだ頃には、霧も少しく剝けかゝつて来たのであつた。

陸の霧は海ほどではなかつたが、それでも黒白もわかぬさ云ふやうな不安の状態が一時間あまりも續いた。それが漸く薄れて来て、あたりが自然の夕暮のけしきに戻つた時、重兵衛の家の入口に倒れてゐるおせんの姿が見出された。おせんは再び顔や手に無数の掻き疵を負つて、髪をふり亂して横さまに倒れてゐたが、更によく見るさその喉節は何物にか無残に喰ひ破られてゐた誰が見ても、もう助ける方法はないと諦め

られたが、素足で門口まで這ひ出して倒れてゐるのから想像するに、おせんは暗い霧のなかで何物にか襲はれて、恐怖のあまりに探りながら門口まで逃げ出したが、遂にそこで悼ましい生贄となつたらしい。勿論聲を立てたかも知れないが、何分にも本人が啞であるのこ、近所の人たちも驚を恐れ、嚴重に雨戸をしめて閉ぢ籠つてゐたので、そこにそんな慘劇が演出されてゐるうちは気が附かなかつたのであつた。

沖の漁師達もだん／＼に引揚げて来た。重兵衛は飛んだ方角へ迷つて行つた爲に、一番おくれて歸つて来たので、その慘劇を知るのが最も遅かつたが、それを知るに彼はしばらく喪心したやうに突つ立つてゐたが、やがて足摺りして、『畜生、畜生』と繰返して罵つた。

暮してゐるらしかつたが、その後ひる間は酒を飲んで寝て暮して、夜になるに小名木川のあたりへ釣りに出て行つた。それが五日もつといた後、かれは出たまゝで歸らなかつた。

あくる朝になつて、その死體が岸の茂みから發見された。彼は兩手で大きい河獺の喉を絞め付けながら死んでゐたのである。重兵衛のからだには別に疵らしい痕も残つてゐなかつた。云ふのであるが、何分にも其時代のこゝで檢視も十分に行き届かず、その死體も本當には判らずに終つたらしい。大きい河獺は、年を経たもので、確に雌であつたさうであるに、T君は最後に註を入れた。

彼の見すばらしい姿を誰も氣を付けるものもなかつた。デサートになり菓子が出た。突然ロートレッツは皿から菓子の中にあつた南京豆をつまんで隣りの當時賣れつ千の大家の鼻先に突きつけて叫んだ。「如何だ、わかるか？ この南京豆は俺がこの間惚れた女そつくりなんだ！」大家が呆れた顔をしてゐるに、彼は又駄りこくつて菓子を食べ始めた。

計 畫

バルザックが或る時彼の尊敬してゐたアンリ・モニエの家で例によつて今度は斯う斯う斯ういふ計畫があるんだと逆上せ始めた。「ね、解つたかね。つまりそつてるに君は僕はきつかり廿五萬法づつ手には入るわけなんだ。」アンリ・モニエ又始つたといふ顔をして、然し至極眞面目な調子で、

「すまないが君、俺の分を廿五萬さ一法として、つまり君の分は廿四萬九千九百九十九法としてくれ